

令和2年度 環境で地方を元気にする
地域循環共生圏づくりプラットフォーム事業

成果報告会 発表資料

活動団体名：かみかつ茅葺き学校

活動地域：徳島県勝浦郡上勝町



キャッチコピー：One team!で2年間！

地域循環共生圏を実現することで目指す地域の姿

山のめぐみを活用した集落の豊かな暮らしの持続

小さな自然再生

仲間ができる

仕事ができる

・伝統的な文化の継承ができる

・昔の暮らしを伝える場ができる

・集落を支える仲間ができる

・小さな自然再生ができる

・集落に人が来る

・集落で経済活動ができる

・茅葺き学校の活動資金ができる

親子体験
プログラム

八重地応援隊

(集落の日常の仕事を手伝う)

町内移住者 茅葺きや農業の技術習得希望者

かみかつ茅葺き学校の実施

暮らしの知恵・技術の持ち主

ゼロ・ウェイスト
タウン上勝
パッケージ化

上勝町役場

ハブ拠点の担い手

ビジネスパートナーとの協働

集落リーダー

映像制作者他
外部ネットワーク保持者

地域資源 = 事業の対象となる可能性の束

地元
食材

昔の
道具

山・川・棚田：
生産資源

山・川・棚田：
生物生息空間

助け合い文化
・金銭を介さない豊かな関係性

山・川・棚田：
美しい景観

上勝ブランド
・ゼロ・ウェイスト

身の回りの材料
でつくる知恵

農業技術
伝統的な神事

山の水、用水

茅葺き民家
八重地花野邸
：景観要素、拠点

ハブ拠点
・WHY、・RISE
・Polester 他

・山の荒廃

・生物多様性低下

・高齢化により、山・棚田・集落の荒廃

・集落に仕事がない

・活動の継続が困難

・拠点の維持に費用が掛かる

・山のめぐみを活用する知恵・技術が失われつつある（人がいなくなる）

・昔の暮らしをする必要がなくなった

・身近にある資源でつくる暮らし
・再生可能な資源でつくる暮らし
・集落で助けあう暮らし

事業Ⅱ 地域資源を活用する制度や技術

地域のありたい未来の実現のために 今年度取り組んだこと

• 「目指す地域の姿」の明確化

- 集落にある昔ながらの暮らしには、「身近で再生可能な資源でつくる暮らしの知恵や技術」がある。その価値の見える化と継承を集落で実現する。さらに、集落の「助け合いの暮らし」に通じる、集落の仕事を介した、有機的な人のつながりの創出を目指すことを明確にした。

• 「集落の日常の仕事」の実践

- 集落で耕作するとはどういうことか、例えば米を収穫するまでに、どれだけの仕事があるか、その過程を実践することで、日常の仕事が道具の管理から、道路整備、水管理、鳥獣害対策など、多くの仕事の積み重ねであることがわかった。→日常の仕事を見える化し、来訪者に手伝ってもらうしくみが必要！

• 「ゼロ・ウェイスト」へのアプローチ

- ゼロ・ウェイストのハブ拠点との交流を実践し、パッケージプログラムづくりの打診ができた。ZERO WASTE TOWN上勝の公式HPに、かみかつ茅葺き学校が掲載された。

• 「仲間づくり」の実践

- 集落の日常を体験させたい、という町内インターン受け入れ組織からの意見をきっかけに、体験を準備するのではなく、茅葺き学校の耕作を手伝ってくれる参加者を募ったところ、こちらの求める人物の参加を得ることができた。このことから、日常の仕事を介した仲間づくりを茅葺き学校の主要な活動として位置づけすることができた。

• 耕作放棄地が茅場になった（小さな自然再生）

- 耕作放棄地が茅場になった。カヤネズミの巣を何度も発見した。

• 八重地集落への人の流れができた

- 茅葺き学校の活動を通して、町外111名、町内90名の人の流れを創出することができた。（集落人口約25名、高齢化80%）

地域のありたい未来の実現のための「事業のタネ」

1	事業名	山の資源を活用した「かみかつ茅葺き学校」の実施		
	概要	・集落住民が講師となり、山の資源を活用した暮らし体験を提供する。 ・親子体験プログラムは、囲炉裏を使った料理や、棚田での農作業体験、藁やシュロを使った道具づくりなど、集落へ来るきっかけづくりとなります。 ・匠体験プログラムは、茅葺き屋根の維持管理に関する技術的な仕事を手伝ってもらうもので、地域貢献、技術提供を希望する、引退組のお父さん世代の技術発揮の場となります。		
	課題・ボトルネック	・山の資源を活用した暮らしの技術・知恵の持ち主の超高齢化	力を借りたい人物・企業像	他集落の技術・知恵の持ち主 集落リーダー
2	事業名	ゼロ・ウェイストタウン上勝でのパッケージプログラムづくり		
	概要	・上勝町内ハブ拠点と、ゼロ・ウェイストでつながり、茅葺き学校の体験プログラムを提供する。 ・集落の暮らしにある「身近な再生可能な資源でつくる知恵・技術」を、ゼロ・ウェイストの視点から再認識し、その価値を伝える。 ・集落の昔ながらの暮らしが見直され、集落が訪問される場になる。		
	課題・ボトルネック	・集落からの情報発信力の弱さ	力を借りたい人物・企業像	・ビジネスパートナー
3	事業名	協働の仲間づくり		
	概要	・集落の日常の仕事を支援する「八重地応援隊」の結成による、集落労働力の補完と、住民との交流。 ・茅葺き民家を活用した経済活動を実施する「ビジネスパートナー」との協働による、空き家空き地の活用。 ・町内ハブ拠点との協働による、上勝ゼロ・ウェイストブランドの向上。 ・町内他集落との協働による、集落の暮らし体験プログラムの充実。		
	課題・ボトルネック	・八重地集落内での合意形成、受け入れ体制ができていない	力を借りたい人物・企業像	・集落の若手リーダー

今年度の環境整備の取組による地域の変化や気づき

話を聞きに行く！

- ゼロ・ウェイストのハブ拠点とつながりができた
- 他地域の茅葺き職人とつながりができた
- 別集落の暮らしの知恵・技術提供者とつながりができた
- 集落内の若手ステークホルダーとつながりができた
- 大学関係者とつながりができた
- ビジネスパートナー候補とのつながりができた

地域のコンセプトを描く！

- 自然資源である、「山・川・棚田」にも、生産、生きものの生息空間、美しい景観、と異なる価値があり、それらを別の事業に結び付けることができた。
- 集落の暮らしに見る「助けあい文化」や、「身の回りの材料で作る知恵」など見えない地域資源に気づき、事業と結び付けた。
- 上勝町が目指すゼロ・ウェイストの本質を茅葺き学校が伝えることができることに気づいた。

事業のストーリーを語る！

- 「集落の日常の暮らし、仕事」が見える化し、茅葺き学校に集まる仲間が、仕事を手伝うことにより、里地・里山としての集落の環境が再生できるとともに、集落住民との関係性の向上につながることに気づいた。
- 「集落の昔ながらの暮らし」を学びたい、あるいは魅力を感じている若い層があることに気づいた。「てまがい」や技術伝承おん有力な担い手であることに気づいた。

地域の目標を立てる！

- 耕作放棄地の再生に取り組むほかに、山の暮らし体験に必要な資源である、竹、シュロ、藁などの資源管理をすることで、里地・里山の維持・再生を目指す。
- 体験プログラムの質の向上、拠点である茅葺き民家の施設の充実を図り、利用者増、収益増を目指す。
- 八重地応援隊によって集落の営みを支援する。集落住民との交流を活性化し、ビジネスパートナーによる空き地空き家の活用を目指す。

今年度の取組におけるボトルネックや新たに見えてきた課題

- 任意団体、実績なしの課題

- かみかつ茅葺き学校は令和2年度に設立した任意団体であることから、金融機関等との交渉に直接臨むにはハードルが高い。
- 助成金等への申請条件を満たさない場合が多い。

- 地域資源の明確化

- 八重地集落の地域資源は、多くが他の中山間地域にもあるものであり、特別なものでない。これらの地域資源をいかに活用するか、活用の多様性や技術こそ地域資源となりえるのではないかと考えた。

- 集落住民との合意形成

- ビジネス展開の提案は簡単だけれど、その実現には集落の合意形成が必要不可欠であるが、そのためには、住民との信頼関係が基盤にある必要がある。
- 高齢化80%、移住者ゼロの集落で、信頼関係を築くことは1年ではできない。

- 集落住民の高齢化

- 集落の暮らしの知恵・技術の持ち主の超高齢化。

今後の展望

ビジネスパートナーとの協働

- ・かみかつ茅葺き学校の目指す地域の姿に共感する、ビジネスパートナーを募集する。
- ・ビジネスパートナーとともに、茅葺き民家の屋根の補修、民泊施設としての整備、を行う。
- ・集落との信頼関係を築き、将来的には、集落の空き地空き家の活用を進める。

八重地応援隊

(集落の日常の仕事を手伝う)

- ・集落の日常的な仕事に見える化する。
- ・日常的な仕事を、八重地応援隊が手伝うしくみをつくる。
- ・山・棚田・集落の手入れをすることによって、里地・里山環境の維持・再生につなげる。
- ・山・棚田・集落の手入れをすることによって、集落住民の信頼を得る。

ゼロ・ウェイストタウン上勝 パッケージ化

- ・ゼロ・ウェイストのハブ拠点と連携し、パッケージプログラムをつくる。
- ・茅葺き民家の体験プログラムの質の向上、随時受け入れの工夫を行う。
- ・町外訪問者が集落を訪れる際のルールづくりを行う。